

みやけの風

第 210 号

平成17年(2005年)2月12日(土)発行
 発行：三宅島災害・東京ボランティア支援センター
 発行責任者：上原 泰男
 東京都新宿区神楽河岸1-1 セントラルプラザ 10階
 東京ボランティア・市民活動センター 気付
 TEL：03-3260-7573 FAX：03-5229-1646
 E-mail：tokyocenter@cmpo.org

三宅島支援センター三宅島事務所の電話番号が決まりました！

住所：三宅島三宅村伊豆1054 伊豆老人福祉館

電話：04994-2-1501

FAX：04994-2-7131

みんなの声

4年ぶりにやっと我が家にたどり着きました

多くの方に支えられての避難生活が終わり、おかげさまでやっと我が家に着きました。

2月2日朝、三池港に着き、暗い中我が家に着きました。10時過ぎた頃、東京電力さんが来て、電気が通りました。夕方には、宮正さんが来て、ガステーブルを備え付けてくれました。

3日には、イシデンさんが来て、テレビアンテナを取り付けてくれました。

4日には、NTTさんが来て、電話の取り付けもして下さいました。

5日には、伊豆の老人福祉館の「三宅島災害・東京ボランティア支援センター」を訪ね、ボランティアさんたちの「ホッとひと休み」の間に、あしたば摘みをしたり、おしゃべりをしたり（もちろん、三宅島の自慢話ですが）して、おじゃましてしまいました。

村の中を歩いていて、ボランティアさんの活動中の赤いのぼりを見ると、「安心と勇気」を感じます。

さて、2月2日の夜、阿古地区は西風が吹き荒れ、4回も停電しました。停電したとき、うれしくて「それいけ」と手さぐりで庭に出て満点の星を見上げ、その輝きの美しさに満足しました。

街灯のなかった子どもの頃、毎晩見っていた星空でした。

2日から5日まで、西風が吹き荒れましたが、今は静かでメジロの鳴き声も聞こえてきます。

椿の花もたくさん咲いています。

私にとって、三宅島はやはりホッとするとこです。

多くの人たちが、復旧・復興に力を注いでいる姿があります。

私も自分でやらなければならないことを、ポツリポツリとやっていますが、三宅島へ帰るのを断念しなければならない方たちのことを思っています。（三宅村阿古 鈴木則子）

高砂自治会で島民をねぎらうお別れ会

島民が、4年半の避難生活解除の宣言を目前の1月31日、島民を気遣って、葛飾高砂の自治会で、私共のためにお別れ会を区長さんや来賓も参加くださり、催して下さいました。

最初に、自治会長さんのご挨拶をいただき、続いて区長さんも「これから復興に向けて大変でしょうが、体に気をつけて頑張ってください」とご挨拶いただきました。引き続き、島民を代表してお礼の言葉をお伝えしました。

大勢の島民、ご夫婦や家族、赤ちゃんまで参加なさって、乾杯で始まりました。自治会の役員の方々が、お別れする島民をねぎらうため、フラダンスや日本舞踊まで披露されました。

続いて、島民たちの島節が歌われ、カラオケと続き、楽しみながら、和気あいあいと和む雰囲気でしたが、それぞれの語り尽くせぬ胸の内は、手拍子を打つ島民の思案は、いばかりだったでしょう！

4年半の長い歳月をお世話になった住民との別れを惜しむ心、島に帰る人、帰れない人、島民の心境は複雑です。

さまざまな選択をとられる島民の皆さんには、新たな出発となります。一日も早く、火山ガスが治まり、島民が健やかに落ち着いた生活が出来ますよう祈るばかりです。

（葛飾三宅会 五十嵐 文子）

==== 三宅島帰島支援ボランティア活動報告 =====

三宅島災害・東京ボランティア支援センター三宅島事務所より、日々の活動報告が入ってきました。みんな、元気で島民の皆さんとの交流もさせていただいているようです。

2月1日(火)

午後9時 竹芝桟橋客船ターミナル前広場にて、出発式を行う。山崎美貴子代表、名和三次保副代表の挨拶に続き、島民代表の挨拶を受ける。

午後10時30分 予定通り、帰島第一陣の島民と共に、今回の三宅島帰島支援ボランティア活動に参加するボランティア26名が三宅島に向かう。

2月2日(水)

午前5時10分 三宅島錆ヶ浜に着岸。27日から環境整備のため島入りしていた先遣隊に出迎えられ、車輜にて、三宅島伊豆地区にある伊豆老人福祉館に設置された「三宅島災害・東京ボランティア支援センター三宅島事務所」に入り、休息後ミーティング、朝食の後、午前9時より出発式を行い、5班に分かれ、各島民宅へ向かう。

【感想】

- ・4年半ぶりに帰った島民の空洞化したかのような家の中で、それでも「家に帰ったぞ」という思いを体全体であらわし、私たちに語りかけるご夫妻の顔と声が印象に残った。
- ・港に着くなり、硫黄の臭いでガスとの共存の厳しさを実感した。そんな中で暮らす島民の方のこれからの不安や期待を一身に感じる事が出来、深く考えさせられた。
- ・4年間との年月と酸性の空気で多くの鉄が錆付いていた。引き戸の鉄製の戸車を取り替えるのにとっても苦労した。人の手入れをしない庭が、いかに荒れ果ててしまうか驚いた。寒風の中での待ち時間が辛く、もっと時間を有効に使いたい。
- ・最初は、ボランティアに対してどう接していいかわからない様子であったが、作業を通し、次第に冗談を交えながら、笑い声や笑顔を見ることが出来た。

2月3日(木)

午前7時起床。朝食、全体ミーティングを経て、9時には島民宅へ各班向かう。12時、休憩・昼食。各班それぞれ、支援先の島民との懇談・交流。午後作業を再開、午後3時過ぎ、センターへ戻る。

【感想】

- ・活動先の方が最初はずごくよそよそしく、頼むことに対して抵抗があったように感じた。しかし、時間が経つにつれすごく気さくに話し掛けてくれるようになってくれて、依頼になかった草むしりもすることになった。お昼のときもいろいろお話をしてくれて、とても嬉しく感じた。自分たちが一生懸命汗を流した分だけ、相手の方が心を開いてくれると感じた瞬間だった。
- ・活動先のご夫婦と火鉢を囲みそれぞれ30分以上話し込む時間が取れ、ボランティア活動の目標だった島民との交流が持てた。民宿を長くされていたお宅で、昭和58年の噴火のこと、引越しの苦労話など、話題は尽きない。
- ・世代の違う人たちといっしょの作業を通じ、交流をしながら貴重な時間を過ごすことが出来た。
- ・この先不安がある中、活動先の奥様は始終笑顔で接していただき、「この時期に来ていただけたことが本当にうれしい」と最後に言ってくれた。この言葉を聞いた時は、少しでもお役に立ててこの島に来てよかったと思った。

2月4日(金)

今日は、Follow班として6班目を編成し、支援センターのチラシ配りなどを行う。また、調査班として、島民の方とボランティアが組になって、島内を回り、依頼がありそうなお宅や共同管理の場所などを調査した。